

新文化運動後期における女子学校の「学潮」と女学生

——『民國日報』とその副刊の報道を中心として——

杉本史子

はじめに

一九一九年に起こった五四運動で、学生が主動的な役割を果たしたことはよく知られている。だが学生たちの矛先は、政権や列強諸国に向けられただけでなく、自らが通う学校にも、容赦なく向けられた。新文化運動期には、全国各地で「学潮」と呼ばれる学校紛争が数多く発生した。学潮とは、学生が校長や教師の追放、留任、または教育改革などを求めて、授業ストライキなどの直接的な抗議行動を起こすことである。

この動きは女子の学校においても例外ではなかった。当時、女子教育は発展に向かってはいたものの、教育の現場には新旧さまざまな思想が入り混じり、数々の混乱が生じていた。学潮は、学生の日頃から蓄積された不満が、最たる形で表れたケースであると言つてよい。従つて学潮を分析することにより、当時の女学生たちがどのようなことに不満を感じ、何を求めていたのかが、具体的に見えてくるのではないだろうか。

一九二四年に発生した北京女子師範大学事件は、魯迅が関わったことから広く知られており、特に文学方面からの研究が進んでいる^①。北京女子師範大学事件の経緯を見る限りでは、同校特有の事情から発生し、特に楊蔭榆という女性校長の個人的な責任が大きかったかのような印象を受ける。だが似たようなケースは、全国各地の女子学校で頻発していた^②。

これらの女子学校における学潮の報道を見ると、学潮が発生した原因、

そして運動の進められ方には、かなり共通する点が多いことがわかる。

つまり北京女子師範大学事件とは、必ずしも特異なケースだったのではなく、当時の社会現象の一つとしてもとらえられるのではないだろうか。

学潮と政治との関わりについては、すでに呂芳上氏による詳細な研究がある。呂芳上氏も指摘している通り、学潮と政治運動とは密接につながっており、切り離して考えることはできない。だが本稿は、学潮を通して女学生の動向を明らかにすることを目的とするため、学校の外へと向けられた愛国運動や社会運動については簡単に触れるに留め、教育現場における争いに焦点を絞って、考察を加えたい。

学潮には必ずと言つていいほど、学外にそれを支援する勢力が存在し、メディアもこの動きに深く関わっていた。上海で刊行された国民党系の新聞『民國日報』^④は、学潮に関する記事が多いことで知られる。『民國日報』は、学潮を支援する立場から数々の学潮を紙面に取り上げ、時には学潮に批判的な他のメディアと、論争を繰り広げることもあった^⑤。本稿では『民國日報』とその副刊行物として発行された『覺悟』『婦女評論』^⑥『婦女週報』から、女子学校の学潮に関する記事を拾い出し、そこから女学生の動向を明らかにしていきたい。報道の中にはもちろん、誇張や捏造が含まれることもある。だがここでは、社会に向けた報道の中で、メディアが一体何を伝えようとしていたかを探るため、学潮をめぐる言説の一部として分析したい。考察の対象とする期間については、狭義の五四

運動が収束した一九一九年の夏より、国内最大規模の学潮とも言える、北京女子師範大学事件が始まる一九二四年の夏までの五年間とする。学潮の報道を見ていくことで、女学生たちがメディアに動かされながら、自らもまた積極的にメディアを利用しようとしていたことも、明らかにするだろう。

一、主な学潮の報道とその概要

まずは史料となる『民國日報』について、簡単に述べたい。『民國日報』は一九一六年、中華革命党「後の中国国民党」のメンバーが上海で創刊した新聞である。編集者には後に国民党内の民主派と呼ばれた者や、マルクス主義に共感を示した者が多い。一九一〇年代後半から二〇年代半ばにかけて、国民党は学生への勢力拡大を図り、軍閥政権に揺さぶりをかけるため、学潮を支援する方針を取っていた。^⑦『民國日報』は党の方針を受け、積極的に学潮を支援する報道を続けた。同紙には他の大型新聞と同様、不定期、あるいは週ごとに副刊という形で副刊行物が付けられた。本稿で取り上げる『覺悟』『婦女評論』『婦女週報』は、いずれも『民國日報』の副刊である。これらの副刊は日刊紙ではないため、個々の学潮の経緯を逐一報道することはなかったが、時事評論としてひんぱんに学潮を記事に取り上げた。

『民國日報』とその副刊に載せられた記事に基づき、一九一九年夏から一九二四年夏までの五年間に、女子学校で発生した主な学潮を並べてみる。

一九一九年八月～九月 江蘇省立第一女子師範学校^⑧ 女性校長が追い出される。
一九二〇年一月～二月 広東省立女子師範学校^⑨ 新任女性校長の就任

を学生たちが拒否する。その後も校長の人事をめぐって、授業ストライキが行なわれる。

山東省立済南女子師範学校^⑩ 新思想を持つ校長の留任を求めて、授業ストライキが発生する。

直隸第一女子師範学校^⑪ 国恥記念行事への参加を許されなかったことから、授業ストライキが発生する。

湖南女子蠶業学校 学生が新任校長の就任を拒否する。校長は兵を動員する。

紹興県立女子師範学校^⑫ 官庁が決めた新任男性校長の就任を学生が拒否する。

浙江省立女子師範学校^⑬ 除籍処分に対し、校長への批判が集まるが、学潮としては未遂に終わる。

無錫県立女子師範学校^⑭ 議員が決めた新任女性校長の就任に反対し、学生たちが現校長の留任を求める。

一九二二年一〇月～十一月 湖南代用女子中学^⑮ 学生集会が延長したことに校長が激怒。学生たちが一斉に退学する騒ぎとなる。

愛国女学^⑯ 学生たちが校長の罪状を宣言する。

一九二二年二月 武進県立女子師範学校^⑰ 校長が教員を異動させたことに対し、学生が反対する。

一九二二年二月～三月 湖北省立女子師範学校^⑱ 教員二人の留任を求

- 一九二二年四月
山東省立濟南女子師範學校 校長の更迭をめぐる学潮が政争に発展する。
- 一九二二年五月～六月
蘇州樂益女子中學¹⁹ 校舍建築の問題をめぐって一時全員が退学する。
- 一九二二年六月
安徽省立第二女子師範學校²⁰ 学校内の派閥争いが、学潮に発展する。
- 一九二二年一〇月～十一月
湖北省立女子師範學校 停学処分を受けた学生たちが宣言文を発表。校長が追い出される。
- 一九二二年十一月²¹
直隸第二女子師範學校²² 校長への批判が強まる。
- 一九二二年十二月
湖南省立第三女子師範學校²³ 卒業生と中途退学者合わせて数十人が女性校長を批判して省政府に訴える。
- 一九二三年三月～四月
浙江省立女子師範學校及び附属中學 学生が校長の追い出しを求める。
- 一九二三年四月
湖北省立女子師範學校 学生が校長の追い出しを求め、校長側の要請で軍隊が出動される。
- 一九二三年四月
紹興県立女子師範學校 学生が校長及び教員の追い出しを求める。
- 一九二三年六月～七月
浙江省立女子師範學校 教員の辞任をめぐる、学生間で対立が発生。学生会が調停に入る。校長が辞任する。
- 一九二三年八月
「漢口」女子師範學校²⁴ 校長が攻撃され、辞職する。

新文化運動後期における女子学校の「学潮」と女学生

- 一九二三年九月
溧陽県立第一女子中學 男性校長を更迭し、女性校長を据えようとしたことに対し、抗議行動が起こる。
- 一九二三年十一月
陝西省立第一女子師範學校²⁵ 教員がある学生を妾にしようとしたことから、学生たちが反発し、授業ストライキを起こす。
- 一九二四年三月～四月
直隸第二女子師範學校 学校改革を求めて校長追い出し運動が発生する。各方面からの支援が集まる。
- 一九二四年四月
山東省立女子職業學校 校長への不満が高まる。
- 一九二四年五月
紹興県立女子師範學校 議員が校長を辞めさせようとしたことに対し、学生が反対。デモ行進を行なう。

以上の報道を見てみると、学潮の多くが、公立の師範學校で発生していることがわかる。これは男子校や共學校の学潮についても、同じことが言える。この理由を呂芳上氏は以下のように述べている。師範學校は学費が免除されていたため、優秀だが経済的にはあまり裕福でない家庭の子女が集まり、社会へ批判的な眼差しを向けがちであった。さらに寄宿舎で生活する学生が多く、社会や學校に対する不満を、容易に行動に移すことができた。また公立校では、各地方の教育行政機関が人事を決めることになっていたが、省長や地方議員が教員の人事に介入することも珍しくなかった。このため、しばしば人事の是非をめぐって、学潮が引き起こされた。学生側の要求の大半が、校長や教員の排斥、あるいは留任という点に集中していることから、教員人事に対する不満が大きかったことがうかがえる。呂芳上氏のこうした指摘は、そのまま女子学

校のケースにも当てはまる。

報道という点からすると、上記以外にも、次のような原因が考えられる。私学の場合、独自の資金で運営されていたため、教学の方針や学校の運営に、報道機関が公然と注文をつけることが、はばかられた。たとえ学潮が起こっても、学校内で処理されていたと思われる。反対に公立校の学校運営は、税金で賄われていたことから、マスコミの格好の非難的となった。報道が公立校に集中しているのは、世論の監視という観点から、公立校に目を向けたマスコミの姿勢とも関わっている。

学潮が発生する要因には、いくつかの決まったパターンが見られる。最も多いのが、除籍処分などの処罰をきっかけに、校長や学校に対する不満が爆発するケースである。新文化運動後期にはまだ女子の就学率が低く、女学生は将来、女性の指導者となることを期待される存在であった。中でも師範学校の学生は、卒業後に教員となることが前提となっていた。多くの女学生にとって、卒業証書は今後の生活のために、なくてはならないものであったはずである。教員を目指していた、さほど裕福でない女学生にとって、除籍処分というのは、死活に関わる問題であった。

二、教育内容に関する不満や要望

では、学潮の内容を具体的に見ていきたい。前章で述べたように、学潮の多くが、学生に対する処分をきっかけとして発生している。だが処分はあくまでもきっかけであり、学生たちの日頃からの不満が、この処分をきっかけに爆発したと考えていいだろう。ではまず、学生たちの教育内容に関する不満や要望から見ていきたい。

女子学校のカリキュラムは、もともと家事科に関する授業の占める割

合が高く、一般の教科は男子の通う学校よりも、低いレベルに抑えられていた。そのため、より高度な教育を受けたいという願いや、上級の学校へ進学したいという希望はほとんどかなえられず、女学生の間には潜在的な不満が蓄積されていたと思われる。

多くの報道からうかがえるのは、学潮を起こした女学生たちが、校長や学校運営者を旧態依然とした古い思想の持ち主であると見なし、その体質を嫌悪していたことである。いくつか取り上げてみると、校長の「頭が古い」²⁷⁾、「時代の潮流に疎い」²⁸⁾「頑固で腐敗している」²⁹⁾、さらに「活気のない奴隷専制教育」³⁰⁾と、枚挙に暇がない。では、女学生たちは具体的にいかなる教育を古いと感じていたのか。いくつかのケースを見てみよう。

一九二二年に発生した安徽省立第二女子師範学校の学潮は、学内の派閥争いがきっかけとなって起こったケースだった。だがその背景には、学生たちのカリキュラムへの不満が渦巻いていた。同校の学生と思われる女性には『婦女評論』に投稿し、このように訴えている。

安徽省の各学校では、毎日決まって六時間の授業がありますが、我々の学校ではカリキュラムがとても乱れており、七時間の日もあれば、三時間の日もあります。二年生の歴史に至っては、今学期は教員すらいません。理系コースの物理化学は、科学の常識を全く持ち合わせていない、施括乾「教務主任の名」が暇を見つけて授業を行ない、適当にごまかしています（金のピンを水銀につけ、それが白色に変わるのを見て、施は万有引力だと言っています。可笑しいと思いませんか?）。

さらに、現在の生活指導主任ともいべき訓育主任が、毎日『列女伝』から格言を引き、自習室の壁に貼っていたとの訴えもある³¹⁾。カリキュラムが充実していないことに加え、伝統的な女性観を学校教育の場で植え付けられることに、我慢できなかつた様子がかがえる。

一九二四年に発生した直隸第二女子師範学校「以下、直隸二女師と略

す」の学潮では、国語教師への不満の声が聞かれるとともに、代数・物理・博物「現在の生物及び地学に相当」の教師たちの不勉強ぶりが訴えられている^④。

一九二三年の浙江省立女子師範学校「以下、浙女師と略す」の学潮でも、学生たちは「博物科では標本がなく、地理科では地図がなく、物理学では実験器具がない。」と訴えている。以上の三校のケースからは、自然科学の授業に対する要望が目立つ。

当時は外国語、特に英語教育に対する不満も大きかったようだ。浙女師では、一九二一年にも五名の学生が処分されている。この事件は結果的には学潮にまで発展しなかったが、『覺悟』誌上で何度も取り上げられ、話題を呼んだ。除籍された学生は、兄にこう手紙を送っていた。

カリキュラムについては、皆が大きな不満を抱いていました。今の時代、中等学校で外国語が少しも重視されていないのは、実に恥ずべきことです。私たちの中にも、転校を主張する者がたくさんいました。

この学生は仲間とともに英語の教員を呼んで、英語の補習をしてもらおうと考えていたようだが、外で習えば学校規則に反し、校内に呼べば校長に認められないという事情から断念した^⑤。その後も学生たちは独自の勉強を続けるが、彼女らの態度は学校当局の気に障り、最終的には正規の試験を疎かにしたという理由で、他の何人かの学生とともに、除籍された。

当時、新しいとされた思想のほとんどは、西洋から取り入れられたものであった。新しい時代の動きを追う女学生は、英語を学ぶことで、横文字で表される新思想を欲していたのかも知れない。

国語については、白話文を提唱するか否かが、新旧を弁別する一つの目安となっていた。一九二四年に起こされた直隸二女師の学潮では、校

長が着任するなり口語文を非難したことが、「頭腦の腐敗」の一例として挙げられている。同校の国語教師もやはり口語文に疎く、「句読点が何であるかを知らない」と批判されている^⑥。先の安徽省立第二女子師範学校の学潮でも、桐城古文学派を自任し、白話文に批判的な態度を取った教員たちが、やり玉に挙げられている^⑦。

ではもう少し具体的に、学生の要求を見てみよう。湖北省立女子師範学校では、一九二二年に学生による授業ストライキが発生した。進歩的な男性の国語教師と、女学生から敬愛されていた女性の体育教師が、校長によって辞任させられたことが原因である。学生たちの出した「宣言」には、こう述べられている。

我々のクラスは最初の二年間、面白くもない書物に埋もれながら、貴重な時間を費やしてきました。これに加え、重なる奴隷生活が、実に苦痛でした。幸いにも、民国九年一〇月より、李廉方先生のご紹介のおかげで、劉子通先生が我々のクラスの国語を教えて下さるようになりました。以来、ようやく我々女性の今置かれている地位や時代の潮流、今後努力すべき方向を、少しずつ知ることができました。「中略」体育を教えてくださったのは、湖南の女性、陳詠聲先生で、学術面でも道徳的な面でも全校の学生から敬愛されています。半年で我々の身体は日を追うごとに丈夫になり、精神も日を追うごとに活発になりました。これまでの意気消沈した無気力は、すっかりなくなりました。

続く文章には、劉子通、陳詠聲の両先生を引き留めるため、授業ストライキをする旨が記されている。さらに、他の教員たちへの不満も、述べられている。

留任している者のほとんどが適任ではなく、時代遅れの頭の持ち主ばかりです。何度も変えてくれるよう要求しましたが、校長のお許

しを得ることができませんでした。数年来、それらの授業を受けても、砂を噛むように味気なく、まったく勉強する興味が持てませんでした。まるで敬愛する者は来ず、排除したい者は去らないかのようです。^⑤

この宣言は校長への懇願という体裁を取っており、やむを得ずストに至った経緯が切々と述べられている。そのことが却って、学生たちがいかに新思想に飢えていたかを浮かび上がらせている。同校ではこの数ヶ月後に、本格的な校長批判が巻き起こり、校長が辞任した。^⑥ その後も騒ぎは収まらず、三年間で校長が一〇回交代するという不安定な状態が続いた。^⑦

多くの学潮に見られるカリキュラムへの批判は、男子校より低いレベルに置かれていた女子校に対する潜在的な不満が表面化したものであったと考えられる。学生たちは何よりもまず、新文化運動に代表される新しい思想を、教育の場でも吸収したいと願っていた。彼女たちはより高度な自然科学の授業を求め、英語を重視し、白話文による国語教育を切望した。その一方で儒教に代表される伝統的な女性観を植え付けられることに反発を示した。こうした要求はそれ以前にも存在していたが、要求を直接学校へぶつけることができたのは、この時期になってからのことである。学校に物を言う世代が登場したと言えるだろう。

三、管理教育への反発

―断髪禁止、手紙の検閲、外出制限をめぐる―

続いて本章では、現在の生活指導に当たる、学生管理の問題を取り上げた。女子学校における学潮の原因の一つが、学生の行動を制限する厳しい規則への不満、つまり現代風に言えば、管理教育への反発であっ

た。これは男子校ではさほど問題とされず、女子校のみに顕著に見られる現象だった。

個別のケースを見る前に、まずは、一九一六年に北京の教育部が各省に通達したという、女学生を罰する五箇条の規則から見よう。

- (一) 断髪にすることを許さない。違反した者は除籍する。
- (二) 纏足は許さない。違反した者は除籍する。
- (三) 理由なく欠席し、隊を組んでデモ行進することは許さない。違反した者は過失二回分として記録する。
- (四) 通学する女子学生は、一四歳を越えてはならない。もし隠したり誤魔化したりしたら、過失として記録する。
- (五) 自由結婚は許さない。違反した者は除籍する。罪は校長にも及ぶ。^⑧

このような規則が出されたということは、裏を返せば、違反する者が跡を絶たなかったことを示している。本章ではまず(一)と(五)の規則と学潮との関わりについて述べ、その後(三)についても考察したい。なお(二)と(四)は学潮と直接関わる事項ではないため、本稿では論じない。

先述したように、学潮の多くは、学生への処分がきっかけとなって発生していた。その処分理由としてよく見られたのが、(一)の断髪だった。^⑨ 教育部の通達で真っ先に断髪禁止が挙げられていることから、教育機関が女学生の髪型に非常に敏感であったことがわかる。当時、未婚女性であることを示すおさげを切ることは、社会への挑発と見なされ、断髪は危険思想に染まった証と見なされた。そもそも、断髪にした女性を最初から入学させない学校も多かった。^⑩

前章でも取り上げた湖北省立女子師範学校では、「学生を侮辱する」学

中には次のような項目があった。「本校の学生は絶対に断髪にすることを許さない。これまで断髪にしたことのある数名の学生は、長く伸ばすこと。さもなければ学校に入らせない」^{④3}。同校で本格的な学潮が発生したのは、この直後のことである。

こうした学校側の動きに対し、『**民國日報**』とその副刊は、短い髪の方が衛生的で、合理的な生活にかなっているとして、断髪を擁護する論説をたびたび載せ、学校側の方針に対抗した。

断髪とともに、学校批判の理由として取り上げられることが多かったのは、手紙の検閲と外出制限である。これは教育部が通達した前出の規則(五)とも関わっている。

一九二一年、『**覺悟**』は浙女師の校長が専制的な手段で学生をコントロールしていると批判した。以下、少し長くなるが同校の学校規則の一部を引用したい。

(一) 土曜の午後三時から四時、日曜の午後三時から五時を除いて、学校の外へ出ることは一切許さない。

(二) 学生が入学する時には、関係者の名をすべて書いて校長に渡すこと。関係のない者と、手紙のやり取りや話をするなどを防ぐためである。

(三) すべての学生の家族には竹の札が渡される。半分は学校に、もう半分は家庭に置く。学生と話をするときには竹の札を持参し、校側の札と合えば、面会することができる。話をするときには、小間使いが傍で聞いており、話した内容を詳しく記憶して校長に報告する。

(四) 学生宛ての手紙はすべて検閲する。関係者の名簿と符合すれば、受け取ることができる。

(五) 用事があれば、必ず校長に休暇を願い出ること。そうすれば外出

を許される。また必ず小間使いを連れて歩き、決まった時刻に学校に戻ることに遅れることは認めない。学校に戻ったら、小間使いが学生の事情を包み隠さず報告する。

(六) 学生と話をするのは、応接室のみ「以下、字が不鮮明」。一〇分を超過してはならない。「後略」

過剰な取締りであるかのように思われるが、これらの規則は、当時の女子学校では珍しいことではなかった。同校で一九二三年に起こった学潮では、上述の諸規則が直接の引き金となっていた。この学潮を支援したメンバーは、『**婦女評論**』の場を借りてこう述べている。「手紙を検閲し、さらにひそかに没収する、また外出を厳禁するというのは、明らかに学生の人格を蔑視し、人権を剥奪するものである」^{④4}。現代の感覚からすると当然の主張のように見えるが、当時この書簡の自由、外出の自由という要求は、恋愛の自由と結び付けられ、「性欲の放縦」という非難を受けがちであった^{④5}。

湖南省立第三女子師範学校では、「一七世紀の老废物」のような教務主任が、校内を厳しく取り締まっていると、『**婦女評論**』に批判が寄せられた。ここでもやはり、手紙の検閲が挙げられている。教務主任たちは、「郵便物を検査するのは当然のことです。恋人探しをする学生がいるかも知れないからです」とはっきりと述べていた^{④6}。

一九二一年、手紙の検閲と恋愛の自由との関係を端的に示す、ちょっとした騒動が、安徽省の安慶で起こった。第一師範学校に通う男子学生が、安徽省立第一女子師範学校の女子学生を一方的に慕って恋文を送ったが、それが事前に女子師範の教務主任に発見された。男子学生はただちに除籍処分となり、さらに罰として恋文の全文が新聞に掲載された。現代ならプライバシーの侵害として、大問題となりそうなきごとである。だが当時のマスコミは、恋文を転載した上で、この男子学生に対し、

概して批判的な見解を述べた。⁴⁹

つまり手紙の検閲・外出制限とは、男女の風聞を立てられたくない学校側の、過剰とも言える防衛措置であった。当時、自由恋愛・自由結婚が盛んに提唱されていたが、社会に広く受け入れられているとはいえない状況にあった。

『婦女評論』の後を継いだ『婦女週報』も、一方的に学校のみを責められないという社評を載せている。⁵⁰ この社評は、手紙の検閲や外出制限が男子校にはほとんどなく、女子校のみに存在する理由を鋭く衝いている。論者はまず、社会が女性の貞操に経済的な価値を見出していることに、そもそも問題があるとする。父や夫にとつて娘や妻は財産であり、彼女らを学校へ送ることは、財産を銀行に預けたも同然である。ならば学校側はこの財産を守るために、金庫に入れて鍵をかけざるを得ない。この社評の論者は、管理教育が学校側の方針だけでなく、保護者の要求でもあることを示し、問題の難しさを指摘した。

手紙の検閲や外出制限は、学校側が男女関係による「風紀の乱れ」を恐れただけではない。外部との接触を禁じたもう一つの理由は、政治運動への参加を防ぐためであった。当時の青年たちは、パリ講和会議などの中国をめぐる国際状況から、中国は亡国の危機に瀕していると認識していた。学生の一部は連日のようにデモを行ない、労働者の中に入り込んで、労働運動の理論的指導者となろうと努めた。この中には、女学生も加わっていた。学生の政治運動への参加は、各地の学生連合会を通して行なわれることが多かったため、学校側は、学生が校外の組織と連絡を取ることを極端に恐れた。

安徽省立第二女子師範学校では、一九二二年の学潮が起こる前年に、学生連合会が主導した数校合同の学潮に呼応した動きがあった。女学生たちもデモ行進に参加し、地元の商店を回ってストライキを呼びかける

など、本格的な運動であったという。同校の学生代表は蕪湖学生会の副会長まで務めたが、他校の男子学生と「正当でない行為」が発生したというデマを流され、運動も勢いをそがれる結果となった。⁵¹

江蘇省立第一女子師範学校では、デモに参加し、商店へストライキの指導に出かけていた学生を校長がのしったことが、一九一九年の学潮の発端となった。校長は門を閉じて学生連合会への参加を禁止し、さらに夏休みの開始を早めて、学生を親元に帰すという措置を取った。⁵² 同校ではこれがきっかけで校長批判が始まり、最後には校長が辞任している。

こうした学生たちの動きを恐れ、外部との接触を閉ざしてしまう学校も現われた。一九二三年の『婦女評論』には、江蘇省代用女子中学⁵³の校長に対する批判が載せられている。それによると、同校では以前、新聞を一切見ることができず、外の事情は全く分からなかったが、学生の再三の要求によって、ようやく一紙だけ新聞を購読することが許されるようになった。二三年に入り、学生は江蘇省全省学生連合会への参加を求めたが、校長から叱責を受けた。校長はこう述べたという。

たとえ本当に中国が亡国となっても、あなた方は一所懸命勉強しさえすればいい。救国の事業に出向く必要はない。よしんば中国が減びても、競志（彼女らの学校の別名）と女子師範が減びなければそれでいい。

右の校長の言は、勉強よりも政治運動に熱心な学生への、極端な反論であろう。結局この学校では、学生の一人が除籍処分となり、学生連合会への参加も取り消された。『婦女評論』は、「救国運動はどうして女性を必要としないことがあるのか。女性は人ではないのか？」と学校側を激しく非難した。⁵⁴

学生連合会への参加は、その学校が進んでいるか否かを計る一つの基準となっていた。『婦女評論』では一九二三年、湖南省立第三女子師範学

校の学生が「礼儀正しく」、学生連合会にも参加しないと、皮肉を込めた記事を書かせている。それによると、同校の女性校長は、いつも次のように訓示していたという。

我々はまず穏やかでうやうやしく慎み深くあらねばなりません。そして勉強に励んでこそ、将来社会で女性たちの模範となることのできるのです。国家の事情は、政府が責任を持つことですから、我々がどうこうする必要はないのです。

だがこうした学校側の姿勢は、学生の反発を招いた。記事の前年には、数十人の卒業生と中途退学者が、省政府に校長を更迭してほしいという請願書を提出する事件が起こっている。

女子学校では、厳しい管理教育への反発から、学潮が引き起こされることも少なくなかった。まず断髪は、学校側から秩序を乱すものと見なされ、処分の対象となった。さらに多くの女子学校には、手紙の検閲と外出制限という規則が存在した。学校側が外部との接触を極端に恐れた背景にはまず、社会で盛んに提唱されていた自由恋愛への恐れがあった。女子学校は自校の学生を守るという理由から、管理を強めた。外部との接触を禁じたもう一つの理由は、政治運動への参加を防ぐためであった。だが学校側がガードを固くし、規則を厳しくして取り締まれば取り締まるほど、学生側の不満は高まった。結果的に学生たちの不満は、政治運動よりもっと身近な学校に向けられたとしても、不思議ではない。

四、女性校長・女性教員追い出しのケースから見た 世代間格差

一九二四年に発生した北京女子師範大学事件は、女性校長が排斥され

たことで知られている。魯迅は当時の学校の状況を「中国の昔からの多くの嫁たちが酷い仕打ちの姑の足下にふみつけられてきたのと同じ」であると評し、女性校長の追い出しを求める学生たちを支持した。だが女性校長の追い出しを求めて起こされた学潮は、北京女子師範大学のケースだけではない。一方で、男性校長の留任を求めて学潮が発生することも珍しくなかった。この章では、女性校長や女性教員の追い出しのパターンを分析することによって、女性同士の連帯より、世代間のつながりの方がより重視された当時の一側面を明らかにしたい。

ではまず一九一九年八月に発生した江蘇省立第一女子師範学校における、校長追い出しのケースから見ていこう。前章で述べたように、江蘇省立第一女子師範学校では、政治運動に加わった学生を処分したことがきっかけで、女性校長である呂恵如への不満が高まり、学潮に発展した。『民国日報』は校長に反対する学生たちの主張をそのまま記事に取り上げ、何度も学潮を支持する記事を書いた。国民党の理論家であった戴季陶は、紙面で呂恵如校長をこう非難している。

呂先生はたしかに一〇年前の維新女性であったと言えるだろう。だがようやく「清末の」西学が大成した」時代の維新党と今の時勢とは、大きくかけ離れている。もし民国八年以後の女性教育家になりたいたのであれば、少なくとも職を辞して、何年か学生をするべきだ。新文化運動期に校長職に上った女性教員は、ちょうど清末から民国初期の良妻賢母主義教育を受けて育った世代である。良妻賢母主義教育は一九一〇年代後半から徐々に否定されていったが、それと同時に上の世代も激しい批判にさらされ、一部の教員は時代の波に消されていった。この動きを後押ししたのが、メディアに携わる知識人男性であった。

母校の校長に就任しようとした女性が、拒否されたケースもある。一九二〇年、広東省の省長は広東省立女子師範学校の校長に、同校を卒

業した何智芳という女性を任命しようとした。ところがこの動きに対し、学生全員が授業ストライキを執行して、彼女の就任を拒絶した。学生たちは、「高等教育を受けた」「学識のある、教学経験が豊富な校長」を任命してほしいと訴えた。何智芳に対しては、「教育の知識が非常に浅く、教学の経験は少しもないと言ってよい。品行道徳については、さらに学生たちの尊敬を受けるに足りない」と容赦ない批評を述べている。加えて学生たちは、来校した何智芳に、教務に関する質問を矢継ぎ早に浴びせかけるといふ洗礼を施した。何智芳は答えられず、早々に退席したという。

学生たちは母校の先輩でもある何智芳を、なぜここまで毛嫌いしたのだろうか。一つには彼女の学歴が自分たちと同等であり、教学経験が不足していることに、物足りなさを感じたためであろう。だが学生が投稿した文章の後半をよく見ると、「学務がわからず、甘んじて人の妾となる何智芳」という文言が出てくる。比喩的な表現とも考えられるが、ここでは何智芳が有力者の妾であった可能性が仄めかされている。学生たちは何智芳個人に対してというよりも、妾という身分に過剰に反応したとも考えられる。当時、進歩的な知識人たちにより、西洋から一夫一妻制が導入され、新しい夫婦の形として熱心に提唱されていた。中等教育を受けた学生たちは、特にこうした問題に敏感だったと思われる。新しい思想の到来によって、女性の間にも旧来とは異なる、新たな序列が生み出されていった。

各地の女子師範学校では、新たな権威付けを図る動きも見られた。女子師範学校は地方ごとに設置され、当地における女子の最高学府であることも多かった。無錫県立女子師範学校では、省議員になりたい官僚が現職校長を辞めさせて、政府関係者の親戚筋である顧毅綏という女性を、校長の職に就けようとした。顧毅綏には他の女学校で校長を務めた経験

があった。しかしながら学生たちは、彼女の就任を拒否し、全体会議を開いて、反対を表明する宣言を出した。主な反対理由は、彼女の学歴が五年制の師範学校の校長にふさわしくないというものであった。

聞くところによると、顧毅綏女士は、わずか二年の師範講習科を卒業しただけだという。しかし私たちのいる学校は、完全な師範学校であり、卒業には五年かかる。今、仮に「我が校の」二年生を完全な「五年制の」師範学校の校長にするとしたら、その資格はあると言えるであろうか。

「無錫女子師範学校は、無錫の女子学校のトップに位置する」と、記事でも述べられているように、ここからは、他の学校と同じにしてほしくないという学生たちのプライドが見て取れる。

紹興県立女子師範学校でも一九二〇年に同様のケースが発生した。ここで拒否されたのは女性校長ではなく、男性校長であったが、その理由はやはり学歴に対する不満であった。学生たちは新任校長が養蚕学校の卒業生だと知ると、「私たちの学校は女子師範学校であり、女子養蚕学校ではありません」と述べ、彼の着任を拒んだ。

学生たちは校長のみならず教員にも、より高い学歴を望むようになっていた。先述した江蘇省立第一女子師範学校では、女性校長が二人の教員を教員に任命したことが批判されている。学生たちは、母校で学んだこの二人の学識が、自分たちと大して変わりが無いことに憤りを見せている。

一九二三年に浙女師で発生した学潮でも、校長が三人の卒業生を教員に任命し、授業をさせたことがやり玉に挙がっている。彼女らの教え方は、「わけがわからなくて、間違いだらけ」だと非難されている。

清末から民国初期には学校教育を受けた女性が圧倒的に少なく、初歩的な教育を受ければ、すぐに教員になることができた。だが新文化運動

後期になると、女子学校の数も少しずつ増え、それとともに学生が教員に求める要求も高くなっていった。その一つが学歴に対する要求であった。

では学生たちは具体的にどのような教員を望んだのであろうか。ここからは校長や教員の留任を求める学潮を例に挙げて見ていきたい。

第二章では、二教員の留任を求める湖北省立女子師範学校のケースに触れた。そこからは、女性解放など、新しい時代の潮流を語る男性教員と、政治的な意見をはっきりと述べる女性教員が、学生たちの支持を受けていたことがわかる。

溧陽県立第一女子中学で発生した学潮は、男性校長の留任を求めたものだった。一九二三年、江蘇省の省議員が、同校の校長である沈宗璜を更迭させ、代わりに女性校長を就任させようとした。その理由は、沈宗璜が学校で「社交の公開」「恋愛の自由」「産児制限」などを提唱したからだとされる。この更迭に対し、学生たちは断固反対するという声明を發表した⁶⁵。そして学生全員がのぼりを手にして、道々ピラを撒きながら、県の役所に押しかけた。『婦女週報』も、女子校に必ずしも女性校長がふさわしいとは限らないという社評を掲げて、学潮を擁護した。「社交の公開」「恋愛の自由」「産児制限」は、いずれも性に関わる新文化運動の新しい主張であり、知識人青年が熱を込めて提唱したテーマである。女学生たちはこういった西洋の思想を持ち込んだ新しい世代の教員を熱望したのである。

だが相変わらず教育行政側は、経験豊かな女性が女子学校の校長の座に就くことを望んだ。女性校長の方が、女子校独自のカリキュラムや学風に精通していると考えられたからである⁶⁶。しかし新しい思想に飢えていた学生は、経験豊富な女性教員よりも、新文化運動の担い手となった新進気鋭の男性教員を望んだ。たとえ海外へ留学した女性であったとし

ても、政治的なメッセージを発信しなければ、「封建的」であると非難された⁶⁷。女学生たちは、上の世代の女性との連携よりは、むしろ新しい世代の男性との連携を望んだ。辛亥革命前後に教育を受けた女性たちからの継承よりも、社会の変革に付いていくことを望んだ、新たな世代の誕生であった。

五、メディアとの連携

学潮を支援したメディアは、やはり新しい世代の知識人によって構成されていた。女学生はメディアの発信する新しい思想に感銘を受け、中にはその思想を実行に移そうとする者も現れた。各校における学潮は決して突発的に発生したのではなく、メディアの影響を強く受けたものだった。

『民國日報』とその副刊が、学潮に同情的な報道をしたことは先に述べた。『民國日報』とその副刊は学潮が発生した事実を伝えただけでなく、時には学潮を煽るような論説を載せることもあった。具体例として、第二章でも触れた杭州の浙女師のケースから見よう。『民國日報』は上海で発行された新聞であるため、地理的に近い浙女師の学内事情は、しばしば紙面に取り上げられた。

一九二一年、『民國日報』の副刊である『覺悟』誌上で、同校の女学生五人が除籍されたことが明らかにされた。処分理由の一つは、「見知らぬ人と話をした」というものであった。この「見知らぬ人」とは、新進気鋭の言語学者、陳望道を指していた。この情報を得た陳望道は『覺悟』誌上に、浙女師の関係者へ宛てた公開書状を發表した。その内容は、以前、貴校の学生が手紙を寄こし、国語の読本や自習方法について自分に教えを求めたことがあったが、どうしてそれが処分理由になるのか、お

答え願いたい、というものであった。^①この公開書状を導火線として、『覺悟』誌上には次々と浙女師批判の記事が載せられた。

この事件は、五人の学生が除籍されたというだけで、社会的に大きなできごとであったとはいえない。だが『覺悟』はこの事件を何度も取り上げ、執拗に学校批判・校長批判を繰り返した。彼らは浙女師は専制的な手段でコントロールされており、奴隷教育を施す牢獄のような学校である、と述べ立て、学校を攻撃した。さらにその矛先は、多方面に向けられた。在学生の中から抗議の声が出ないのはおかしい、杭州学生会はなぜ行動を起こさないのか、^②浙江省の住民はもつと浙女師の事件に関心を向けるべきだ、と連日のように学潮を煽るかのような記事が載った。

結局、この事件は学潮に発展しないまま幕を閉じたが、約一ヵ月半の間に『覺悟』誌上にはこの学生処分事件について、合計二〇本もの記事が載せられた。いかに『覺悟』が浙女師の動向に注目していたかがよくわかる。

浙女師ではこの二年後の一九二三年に、校長の追い出しをはかる本格的な学潮が巻き起こった。だが今度の学潮で、積極的に学潮を支援したのは『民國日報』やその副刊ではなく、『新浙江報』という杭州の急進派が出した雑誌であった。

一方『民國日報』副刊の『婦女評論』は、「浙女師紛争についての談話」という、何とも歯切れが悪い論評を出している。この論評は、編集者の一人であった沈雁冰が、同校の同郷女性から聞いた話を紹介するという体裁を取っている。この女性は、校長追い出し派、擁護派のどちらにも属さないとした上で、こう述べる。

このたびの紛争で、墨「校長の姓」追い出し派は、明らかに外部からの援助を受けています。私はこのことについて、反対はしません。「中略」しかし彼らのやり方には、決して賛成できません。彼らは挑

発的にそしつたりのものしつたりし、マスコミとしての、真面目で慎重な態度を持ち合わせていません。彼らは政治的な手段を使って、事を運ぼうとしているのです。^③

沈雁冰はこの女性の口を借りて、校長の学校運営方針には反対だが、学潮の進め方にも問題があると、暗に述べている。実は、この紛争で攻撃にさらされていた校長派の教員の一人が、沈雁冰の友人であった。沈雁冰は友人が『新浙江報』に攻撃されていることを見かねて筆を執ったとし、こう弁明している。

しかし読者に誤解のないようお願いしたい。私は楊朗垣「友人の名」のために不平を述べているのであって、決して消極的に女師校側を庇いだてしているのではない。(女師校のやり方は、新しい潮流にふさわしくない。急いで改革すべきだという点は、疑いを容れない)。^④

二年前には鋭く校長を攻撃していた沈雁冰であるが、その筆の運びは鈍い。さらに一週間後には、当の友人までが弁明を載せている。こうした『婦女評論』の動きに対し、学潮を支援するJNという人物は、沈雁冰を批判する声明を出した。^⑤だがこれ以降、同誌には事件についての報道は見られなくなった。

一九二二年、蘇州の樂益女子中学で、校舎の建築をめぐる問題から学生全員が退学するという事件が発生した。このときも、攻撃された学校の経営者は編集者の知り合いであった。そのため『覺悟』は、学生側の言い分を掲載しながらも、攻撃された張先生は教育を重んじる立派な人物であると擁護し、さらにこの学校が人に利用されないように、と注意さえ呼びかけている。^⑥

このように『民國日報』とその副刊は、すべての学潮を一律に支援していたわけではなかった。彼らの矛先は学校当局に鋭く向けられたが、そこに「身内」が存在するようときには、攻撃の手は緩められ、曖昧

な表現が用いられた。あるいは、報道そのものがなされなかった可能性もある。つまり学潮に関しては、かなり恣意的な報道がなされていたと言える。ここには当然、政治的な配慮も加わっていたと考えなければならぬ。

メディアにはメディア側の事情がある一方、学生側もメディアを巧みに利用した。何の力も持たない学生が、自分たちの声を世間に伝えるには、メディアだけが頼りであったことは想像に難くない。学生たちは教員への不満や学校の腐敗ぶりを逐一書き立て、新聞・雑誌社に送った。本人ではなく、家族や知人が女子学校の内実を投稿することも、少なくなかった。

学潮では、運動を起こした学生たちが、新聞に「宣言」を出すパターンも定着していた。多くの「宣言」では、まず学潮を起こすに到った経緯が詳しく述べられ、次に学生の要求が提示され、さらにそれがかなえられるまで運動を続ける決意が示された。一九二〇年の山東省立女子師範学校、⁹⁷一九二〇年の直隸第一女子師範学校、⁹⁸一九二一年の無錫県立女子師範学校、⁹⁹一九二二年の湖北省立女子師範学校、¹⁰⁰一九二〇年及び一九二三年の紹興県立女子師範学校、¹⁰¹一九二三年の溧陽県立第一女子中学、¹⁰²一九二四年の山東省立女子職業学校、¹⁰³そして後述する一九二四年の直隸二女師における各学潮では、いずれも学生の出した「宣言」がそのまま新聞に掲載されている。「宣言」のすべてがメディアに取り上げられるとは限らなかったが、多くはメディアに取り上げられることを意識した、あるいはメディアそのものに向けて発信した「宣言」であった。教育庁や校長宛てに提出した請願書が紙面に取り上げられることもあったが、これもまた学生が直接メディアに宛てて送ったものだと思われる。

一九二四年の直隸二女師の学潮は、メディアを巧みに利用したことにより、多方面からの支援を得て、「勝利」した一例である。『民國日報』

は上海を拠点としていたため、直隸省「現在の河北省」で発生したこの事件で、主導的な役割を果たしたとは言いがたい。だが上海からの支援を伝えることで、一定の後方支援の役割を果たしたと思われる。以下、『民國日報』の記事をたどることによって、メディアと学生との連携を確認したい。

一九二四年三月一九日、『民國日報』は五日前に直隸二女師で学潮が発生した事実を伝えた。校長が横暴を極め、請願に来た学生たちを、手下を使って殴らせたという。『民國日報』は学潮が発生した事実を伝えると同時に、早くも学生自治会が出した第一次宣言を掲載した。¹⁰⁴その二日後にはまた、学生たちによる第二次宣言が発表された。¹⁰⁵二五日にはさらなる「宣言」が発表され、後任の校長に望む四つの条件など、具体的な要求が示された。¹⁰⁶

二九日には天津の女性たちから、学生の除籍処分を憤りを表明するという通電がもたらされた。¹⁰⁷三一日には直隸二女師の学生自治会より、五度目の「宣言」が発表された。こうした動きに答え、『民國日報』は四月一日と四日に、学生に同情する社説を大々的に載せた。同紙はこのたびの学潮を「女子教育界における価値あるできごと」であり、「女性が新たな道を歩むに当たつての砲声だ」と称賛した。¹⁰⁸

四日には、上海大学の女学生からも、援助の声明がもたらされた。彼女らは副刊の『婦女週報』で、今回の学潮に関する特集を組みたいと考えており、各界からの支援を求めている。¹⁰⁹ここからは異なる学校の学生同士が、新聞という媒体を通して、手を組もうとする様子が見え始める。上海大学の学生による支援の方法もまた、メディアを使って社会に呼びかけようとするものであった。

続いて九日には、婦女問題研究会・婦女評論社・中国国民党上海婦女部の三団体が、支援を表明した。¹¹⁰一三日には、同校の地元で保定中等学

校学生連合会が成立し、直隸二女師への支援策を打ち出した^⑧。二二日、ついに学潮は直隸二女師の学生自治会が全国の同胞に向け、連合戦線を組んで全国の「反動女子教育」を追い出してほしい、と呼びかけるまでに発展した。この呼びかけでは、「二百人余りの教育問題ではなく、二億の女性が頭をもたげる運動である」との見出しが目を引く^⑨。そしてとうとう四月末、校長が病気を理由に職を辞し、学生たちも授業に復帰することで、直隸二女師の学潮は学生側の「勝利」に終わった。

以上の動きからは、学生がメディアに向けて発信した「宣言」が反響を呼び起こし、新聞を媒介として次々と学生団体や女性団体からの支援が集まり、最終的にそれが校長を追いつめていく、という構図が見取れる。ここでは『民國日報』の報道のみを取り上げたが、直隸二女師の「勝利」には、マルクス主義に接近した天津の新聞『婦女日報』が果たした役割も見過ごせない。北京女子師範大学事件でもメディアが大きな役割を果たしたが、直隸二女師のケースからは、それ以前にすでに同様のモデルが確立されていたことがわかる。

一方『婦女雜誌』など、商業ベースに乗ったメディアは、さほど学潮の報道に熱心ではなかった。多くの女子学校で定期購読され、そこで読者を獲得したという同誌には、学潮を支持するような記事は載せられなかったのだろう。『民國日報』は国民党の意向を受けていたからこそ、支援が可能であったとも言える。

『民國日報』とその副刊は学潮を支援し、時には学潮を煽るかのような記事を載せた。当時、同紙の周辺には留学帰りの青年が多く集まっており、『民國日報』やその副刊は、国民党内の民主派やマルクス主義に接近した黨員たちが、自らの主張を展開する場ともなっていた。彼らは「遅れた」女子学校に対し、儒教批判や女性解放という立場から、攻撃を加えた。「進んだ」女学生もこうしたメディアの論調に影響を受け、学校批

判を実際の行動に移していった。学潮の報道には恣意的な一面もあったが、それでも学生にとって、メディアは頼みの綱であった。学生たちはメディアの支援を受けるだけでなく、自らもまた積極的にメディアを利用した。学潮は、新文化運動期の知識人青年が主導するメディアの後押しを受け、「進んだ」女学生がそれに応えるという、双方からの作用で成り立っていた。

おわりに

新文化運動後期における女子学校の学潮からは、この時期の女学生たちの苛立ちを見て取ることができる。当時、女子の就学率は清末に比べれば格段に高くなっていたが、まだ多くの女性にとって、中等教育を授ける女子学校は、手の届かぬ場所であった。女性たちの中でも将来を期待される存在であった女学生は、学校教育にも新しい動きを求めようとした。彼女たちは伝統的な学問より、新文化運動に代表される西洋の科学や、白話文による教育を望んだ。また教員にも高い学歴とラディカルな思想を求めた。北京大学など、一部の学校では、新文化運動の旗手たちが教員として招かれ、急速に新しい方向へと進んでいた。だが女子学校の多くは社会からの批判を恐れるあまり、女学生への管理を緩めようとせず、学校改革の歩みは遅れがちであった。一部の女学生の中には、旧態依然とした校風の中で置き去りにされている、という焦りが生じていたと思われる。学潮とはこの苛立ちが、そのまま学校へ向けられたものでもあった。さらに女学生の矛先は、清末から民国初期にかけて教育を受けた女性教員に向けられることも少なくなかった。新思想の導入という点では、学校よりもはるかに一部メディアの方が進んでいた。女学生たちは、新文化運動への理解に乏しい上の世代の女性たちよりも、新

しい世代の知識人男性と手を組むことを望んだのである。

従来、女子学校における学潮は、反動教育に対して立ち上がった女学生たちの偉大な闘争であるとして、女性解放運動史の中で高く評価されてきた。だが多くの学潮を見てみると、彼女たちは抑圧を受けて突発的に立ち上がったわけではなく、ある程度決まったパターンに則って、運動を進めていたことがわかる。新文化運動後期における女子学校の学潮とは、変革を求める時代の中で、女学生とメディアとが連動して作り出していった一つの社会現象でもあった。

もちろんすべての女学生が、学潮に加わったわけではない。中には安定した環境を求め、頻発する学潮を苦々しく思う女学生も少なからず存在したであろう。本稿で取り上げたケースは、あくまでも突出した行動を取った一部の女学生たちの動向である。

一九二〇年代半ばをピークとして、学潮は沈静化していった。一九二八年、北伐を完成させた南京国民政府は、国内の安定を第一と考え、学潮を抑え込む方向へと方針を転換した。その後も学潮の支援に力を入れたのは、学生を通して世論の形成を図ろうとした共産党であった。だが、学生の個人的な要求は二の次とされ、相継ぐ日本の侵略も加わって、学潮は次第に反日運動へと収斂されていく。

新文化運動後期の学潮に参加した女学生の中には、そのまま政治の道に進む者も現われた^④。一方、三〇年代には都市中間層が育ち、上海などの大都市では、主婦による消費ブームがまき起こった。この消費社会の一翼を担ったのも、また彼女らの世代であった。新文化運動後期の女学生は、さまざまな意味で時代の先端を走った一群であったと言えるかもしれない。

注

- ① 陳漱渝『魯迅与女師大学生運動』北京人民出版社、一九七八年。丸山昇『魯迅—その文学と革命—』平凡社、一九六五年。飯倉照平編『ある学生虐殺事件の前後—北京女子師範大学の闘争から三・一八まで—』『中国』第六四号、一九六九年。細谷草子『女師大事件』をめぐる『語絲』と『現代評論』の論争について』上下『野草』一九七四年冬第一六号、一九七五年初夏第一七号。櫻庭ゆみ子『女校長の夢—中国女性解放運動先駆者としての北京女子師範大学校長楊蔭榆—』『魯迅と同時代人』汲古書院、一九九二年。山内一恵『女師大事件をめぐる二つの訴訟』『中國文學會紀要』第一一號、一九九〇年。山内一恵『国立北京女子高等師範学校校長許寿裳の辞職をめぐって—女師大事件への前奏—』『關西大學中國文學會紀要』第二七號、二〇〇六年三月。拙稿『中国近代における女子教育問題—北京女子師範大学事件が示すもの—』『立命館文學』第五六〇号、一九九九年六月など。

- ② 女子学校における学潮を総合的に扱った研究は、管見の限りではまだない。個別の学潮を扱った論文としては、馮杰・任智英「直隸女二師学潮述論」『河北師範大学学报』哲学社会科学版、第三一卷第四期、二〇〇八年七月があり、学生側の勝利は中国の女権運動史における重要な一ページであると称えている。また呂美頤・鄭永福『中国婦女運動（一八四〇—一九二二）』河南人民出版社、一九九〇年や蔣美華『二〇世紀中国女性角色変遷』天津人民出版社、二〇〇八年でも、学潮は女性解放の表れであるという観点から、何校かの学潮を取り上げて論じている。

- ③ 呂芳上『從學生運動到運動學生—民國八年至十八年—』中央研究院近代史研究所、一九九四年

- ④ 本稿では一九八一年に人民出版社より出された影印版を参照した。『民國日報』副刊の『覺悟』と『婦女週報』についてはこの影印版を参照、『婦女評論』については京都大学人文科学研究所所蔵の私製版（『民國日報』社発行の複製版の複写）を参照した。

- ⑤ 一例を挙げると、『評傾陷浙女師學生的社評』『民國日報』一九二三年四月一日では、学潮を批判した『時事新報』の社評を取り上げて、非難を浴びせている。

- ⑥ 雑誌『婦女評論』については、南雲智「雑誌『婦女評論』について」『櫻林大學中國文學論叢』第七號、一九七九年三月に詳しい。
- ⑦ 前掲『從學生運動到運動學生——民國八年至十八年——』
- ⑧ 清朝末期に寧垣属女子師範学堂として創設され、辛亥革命期に一時期閉校となるが、一九一二年に江蘇省立第一女子師範学校と改名され、再出発する。一九二二年の学制改革の影響を受け、一九二七年に江蘇省南京女子中学となる。
- ⑨ 一九〇七年に官立女子初級師範学堂として創設される。中華民國成立後、広東省立女子師範学校と改名される。一九二八年に広東省立第一女子師範学校となり、一九三五年に広東省立広州女子師範学校となる。一九五六年に閉校となった。
- ⑩ 一九〇八年、官立女子師範学堂として創設される。一九一四年に官立保姆養成所と合併し、山東省立済南女子師範学校となる。一九四九年、省立済南師範学校と合併し、翌年、山東省済南師範学校となって、今に到っている。
- ⑪ 一九〇六年、北洋女子師範学堂として創設される。一九一三年、直隸女子師範学校と改名し、一六年には直隸第一女子師範学校となる。二八年には河北省立第一女子師範学校となる。人民共和國成立後は、主に芸術、美術を教える学校となり、一九八〇年に天津美術学院と改名されて、現在に到っている。
- ⑫ 一九一一年、紹興明道女子師範学堂として創設される。一九一五年、県立校となり、紹興県立女子師範学校と改名される。一九二八年に浙江省立第五中学師範部に編入され、現在は紹興市第一中学となっている。
- ⑬ 一九〇四年、杭州女学校として創設される。一九一二年、浙江省立女子師範学校と改名される。一時、男子中学と合併されたこともあるが、また女子校として独立する。一九五八年、男女共学校となる。現在は杭州第十四中学となっている。
- ⑭ 一九一二年に創設され、無錫県立女子師範学校となった。その後、たびたび校名を変え、一九五二年には無錫市第一女子中学となった。文革が始まると、要武中学と名を変え、男女共学校となる。一九七二年、無錫市第十一中学となる。一時、もとの競志女学とともに東林中学へと編入された。だが女子の伝統校であったことから、女子中学への復興が検討され、現在、無錫市第一女子中学となって再び女子校としての歩みを始めた。
- ⑮ 一九〇五年に朱劍凡が女性のために開いた周氏家塾を始まりとする。一九〇七年に、周南女学堂と改名され、一二年には湖南私立周南女子師範学校となる。一六年には中学となる。一九二〇年より、省政府の委託で湖南代用女子中学と改名されるが、二九年にはまた湖南私立女子中学に戻る。人民共和國成立後は湖南省立周南女子中学となり、六八年に男女共学校となった。一九八四年、長沙市周南中学となり、現在に到っている。
- ⑯ 一九〇二年、蔡元培らが愛国女学を創設した。創設当初は革命に役立つ女性の人材を養成する機関であったが、一九〇七年に一般の女学校へと改編された。一九二七年に愛国女子中学と改名する。一九五六年には公立校となり、文革期に男女共学校となった。現在、上海市愛国中学が、その校名を受け継いでいる。
- ⑰ 一九〇六年、地元の教育家により粹化女学として創設され、一九一二年に武進県立女子師範学校となる。その附属小学校が、現在も常州市実験小学として引き継がれている。
- ⑱ 一九〇五年に私立の女子師範学堂として創設され、翌年、湖広総督の張之洞により公立化される。一九二七年、湖北省立第一女子中学に編入される。一九六九年、男女共学校となる。その後、女子中学に戻ったこともあるが、二〇〇六年には再び共学校となった。現在は武漢市第三十九中学と呼ばれている。
- ⑲ 一九二一年に張充和が創設した私立女子中学校。一九五〇年代に他の私立校とともに、蘇州市第一中学校に編入され、今に到っている。
- ⑳ 一九〇六年、安徽女子公学として蕪湖に創設され、一九一二年、安徽省立第二女子師範学校と改名される。一九二八年、省立第二女子中学へと改編される。一九五八年に、蕪湖第十中学と名前を変え、男女共学校となった。
- ㉑ 報道されたのは、一二月に入ってからのことである。
- ㉒ 一九〇六年、直隸女学堂として創設され、一九一五年に直隸第二女子師範学校となる。その後もたびたび校名を変え、文革期に男女共学校となった。一九七八年、保定市第十七中学となる。現在は高等部が分かれ、河北

- 保定外国語学校となっている。
- ②③ 一九一二年、湖南省衡陽に創立される。毛沢東の従妹が学んだことでも知られる。一九九六年に省の重点中学に指定される。現在は永興県第一中学となっている。
- ②④ 湖北省立女子師範学校を指していると思われるが、確かではない。
- ②⑤ 一九一二年、陝西省立第一女子師範学校として創設される。一九三四年には中学部が陝西省西安女子中学となる。一九四九年、陝甘寧辺区西安女子中学と改名され、六八年には男女共学校となる。七二年、西安市第八十九中学と改名され、現在に到っている。
- ②⑥ 前掲『從學生運動到運動學生—民國八年至十八年—』七四—一〇四頁
- ②⑦ 「直隸二女師突起風潮」『民國日報』一九二四年三月一九日
- ②⑧ 「學生會斥浙女師校長」『民國日報』一九二一年四月五日
- ②⑨ 「南京一女師風潮所聞」『民國日報』一九一九年八月二六日
- ③⑩ 拜梅女士「蕪湖二女師將被改造的情形」『婦女評論』第四四期、一九二二年六月七日
- ③⑪ 「直隸二女師突起風潮」『民國日報』一九二四年三月一九日
- ③⑫ 「浙女師學生驅逐校長」『民國日報』一九三三年三月二七日（二八日の誤り）
- ③⑬ 保時「一個被斥退學生的經過和批評」『覺悟』一九二二年四月四日
- ③⑭ 「直隸二女師突起風潮」『民國日報』一九二四年三月一九日
- ③⑮ 拜梅女士「蕪湖二女師將被改造的情形」『婦女評論』第四四期、一九二二年六月七日
- ③⑯ 「湖北女子師範罷課宣言」『民國日報』一九二二年三月七日。なお『晨报』でも三月一日に同じ「宣言」を掲載している。
- ③⑰ 「鄂女師校長毆辱女生風潮」『民國日報』一九二二年一月五日
- ③⑱ 「武昌各校學潮之醞釀」『民國日報』一九二四年七月六日
- ③⑲ 「南京快信」『申報』一九一六年九月二七日（上海書店影印本、一九八二年を参照）
- ④⑰ 断髪については高島航「一九二〇年代の中国における女性の断髪—議論・ファッション・革命—」『中国社会主義文化の研究』京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター、二〇一〇年に詳しい。
- ④⑱ 例えば大同学院では、断髪的女性が入試に合格したにも関わらず、入学を拒否されるという事態が発生している。楊璿玉「爲拒絕剪髮女生質大同學院院長」『婦女評論』第一〇期、一九二一年一〇月五日
- ④⑳ 原文は學生須知。
- ④㉑ 武漢學生聯合會「侮辱學生人格的鄂女師規約」『婦女評論』第五六期、一九二二年八月三〇日
- ④㉒ 余孤「杭州女師範底詳情」『學悟』一九二二年三月七日
- ④㉓ J N「浙女師風潮底眞因」『婦女評論』第八八期、一九二三年四月二五日
- ④㉔ 雁冰「關於浙女師風潮的一席談話」『婦女評論』第八七期、一九二三年四月二一日
- ④㉕ 筱晴「一封攻擊湖南女界的信」『婦女評論』第九二期、一九二三年五月二三日
- ④㉖ 一九〇九年に安慶女子師範学堂として創設された。一九一二年、安徽省立第一女子師範学校が建てられたが、先の安慶女子師範学堂と同じ流れを汲むものとされている。一九二八年、安徽省立第一女子中学となり、その後もたびたび校名を変えている。一九五六年、安慶第三初級中学と合併して、安慶市第二中学となり、現在に到っている。
- ④㉗ 道海「浮蕩少年與學校專制」『覺悟』一九二二年九月二九日
- ④㉘ 晏始「社評」『婦女週報』第一一號、一九二三年一〇月三一日
- ④㉙ 克瀛「安徽女子前途底障碍」『婦女評論』第一九期、一九二二年二月七日
- ④㉚ 「女師代表致呂惠如書」『民國日報』一九一九年八月二八日
- ④㉛ 一九〇五年に教育家の侯鴻鑑により無錫私立競志女学として創設された。一九一九年、江蘇省代用女子中学と名前を変えたが、一九二七年には競志女子中学とされ、競志の名が復活した。一九五三年、公立校となり、無錫市第二女子中学となった。一九七二年、無錫市第十二中学となり、現在は無錫市東林中学という校名になっている。
- ④㉜ 吳啓人「無錫底女子教育界」『婦女評論』第九八期、一九二三年七月四日
- ④㉝ 筱晴「一封攻擊湖南女界的信」『婦女評論』第九二期、一九二三年五月

- 二三日
- ⑤6 張湘耘「湖南第三女子師範底女校長與女學生」『婦女評論』第七二期、一九二二年二月二〇日
- ⑤7 魯迅「『碰壁』之後」『語絲』第二九期、一九二五年六月一日。日本語訳は学習研究社『魯迅全集』を参照した。
- ⑤8 季陶「呂先生自己覺悟罷！」『民國日報』一九一九年八月二四日
- ⑤9 「粵校拒絕校長大風潮」『民國日報』一九二〇年一月一八日
- ⑥0 「無錫女師之校長風潮」『民國日報』一九二一年六月二四日
- ⑥1 「紹興女師校底校長潮」『民國日報』一九二〇年一〇月二六日
- ⑥2 「請撤南京女師範校長」『民國日報』一九一九年八月一六日
- ⑥3 「浙女師學生驅逐校長」『民國日報』一九二三年三月二七日
- ⑥4 「湖北女子師範罷課宣言」『民國日報』一九二二年三月七日
- ⑥5 「陽溧女校學生新思想」『民國日報』一九二三年九月一日
- ⑥6 「溧陽女中學生之奮鬪」『民國日報』一九二三年九月二日
- ⑥7 高山「社評」『婦女週報』第四號、一九二三年九月二日
- ⑥8 「教育會女師風潮報告」『民國日報』一九一九年九月九日
- ⑥9 湖南省立第三女子師範學校では、アメリカ婦りの女性校長が「良妻賢母」の訓話で学生を指導していると批判されている。筱晴「一封攻撃湖南女界的信」『婦女評論』第九二期、一九二三年五月二三日
- ⑦0 大白「請看開除女學生的罪名」『覺悟』一九二二年三月二日
- ⑦1 陳望道「陳望道爲浙女師開除學生事致該校辦事人書」『覺悟』一九二二年三月四日
- ⑦2 思曉「讀致浙女師辦事人書」『覺悟』一九二二年三月七日
- ⑦3 玄虛「告浙江女子師範教職員」『覺悟』一九二二年三月一八日
- ⑦4 猛濟「社会裡的一個大問題」『覺悟』一九二二年三月一〇日
- ⑦5 平鳴「浙女師開除學生事件底同情者」『覺悟』一九二二年三月一八日
- ⑦6 雁冰「不僅僅是幾個學生的事」『覺悟』一九二二年三月一三日、心如「浙江人啊！」『覺悟』一九二二年三月二四日
- ⑦8 雁冰「關於浙女師風潮的一席談話」『婦女評論』第八七期、一九二三年四月一日
- ⑦9 雁冰「替楊朗垣抱不平」『婦女評論』第八七期（一週前に出されたものも第八七期となっている）、一九二三年四月一八日
- ⑧0 雁冰「不僅僅是幾個學生的事」『覺悟』一九二二年三月一三日
- ⑧1 朗垣「楊朗垣底辯解」『婦女評論』第八八期、一九二三年四月二五日
- ⑧2 J N「浙女師風潮底真因」『婦女評論』第八八期、一九二三年四月二五日
- ⑧3 季平「關於女學界的兩封信」『覺悟』一九二二年六月二日
- ⑧4 「粵校拒絕校長大風潮」『民國日報』一九二〇年一月一八日
- ⑧5 「女師學生一封信」『民國日報』一九二三年四月三日、「鄂女師學潮伏波再起」『民國日報』一九二四年四月二四日
- ⑧6 保時「一個被斥退學生的經過和批評」『覺悟』一九二二年四月四日
- ⑧7 「山東女師亦發生風潮」『民國日報』一九二〇年四月一日
- ⑧8 「直女師校全體解散」『民國日報』一九二〇年五月一日
- ⑧9 「無錫女師之校長風潮」『民國日報』一九二一年六月二四日
- ⑨0 「湖北女子師範罷課宣言」『民國日報』一九二二年三月七日、「湖北女師風潮呼籲聲」『民國日報』一九二二年一〇月二九日、「鄂女師校長毆辱女生風潮」『民國日報』一九二二年一月五日
- ⑨1 「紹興女師校底校長潮」『民國日報』一九二〇年一〇月二六日、「紹女師反對校長宣言」『民國日報』一九二三年四月二〇日
- ⑨2 「陽溧女校學生新思想」『民國日報』一九二三年九月一日
- ⑨3 「魯女職校風潮解決難」『民國日報』一九二四年四月一八日
- ⑨4 「請撤南京女師範校長」『民國日報』一九一九年八月一六日、「女師代表致呂惠如書」『民國日報』一九一九年八月二八日、「浙女師學生驅逐校長」『民國日報』一九二三年三月二七日
- ⑨5 直隸第二女子師範學校の学潮については、前掲「直隸女二師学潮述論」に詳しい。
- ⑨6 「直隸二女師突起風潮」『民國日報』一九二四年三月一九日
- ⑨7 「直隸二女師驅燕二次宣言」『民國日報』一九二四年三月二一日
- ⑨8 「直隸二女師風潮未已」『民國日報』一九二四年三月二五日
- ⑨9 「天津女界之義憤」『民國日報』一九二四年三月二九日
- ⑩0 「直隸二女師校風潮」『民國日報』一九二四年三月三一日
- ⑩1 「學生新劫」『民國日報』一九二四年四月一日、「學潮中的保定女師」『民

『國日報』一九二四年四月四日

⑩② 一九二二年に中国国民党と中国共産党との合作によって創設された。共産党の初期の指導者やマルクス主義に接近した学者たちが、教鞭を執ったが、一九二七年に閉校となった。現在ある上海大学は、一九九四年に上海工業大学など、四つの学校が合併してできた大学であり、直接的なつながりはない。

⑩③ 「上海大學女生援助保定女師」『民國日報』一九二四年四月四日

⑩④ 一九二二年、『婦女雜誌』『婦女評論』を基盤として意見を發表していた知識人たちが、女性の問題を多方面から研究するために作った研究会。発起人には、沈雁冰、周作人、周建人、章錫琛など、当時の女性解放運動を

理論面からリードしていた人物の名が並ぶ。

⑩⑤ 「三團體援助保定女師」『民國日報』一九二四年四月九日

⑩⑥ 「保定中等學校學生聯合會成立」『民國日報』一九二四年四月一三日

⑩⑦ 「直隸二女師學生呼籲書」『民國日報』一九二四年四月二一日

⑩⑧ 一例を挙げると、一九二二年の湖北省立女子師範学校の学潮で、主導的な役割を担った夏之栩は、共産党に入党して女性幹部となり、人民共和国成立後は、武漢市委組織部部长、秘書長、中南軍政委員会委員などを務めた。

(本学非常勤講師)